

ミズイロオナガシジミとは、京都市左京区の大文字焼「妙法」が火入れされる山斜面でアカシジミとともに初の出会いをしているが、1954年頃の話で当時は採集をするだけで写真記録をとるという習慣はまったくなかった。その後、東京国分寺市に住んだ時期があって、家族と遊んだ狭山湖周辺で採集した個体が残っていたりする。

本種は、翅表があまりにも地味で斑紋変異がでたりする翅裏の方が美しいチョウとされるが、図示した兵庫県佐用町での採集標本にみるような後翅はなかなか味わいがある。

近縁のウスイロオナガシジミに比べれば生息分布が広くてその生息地では普通種という位置づけとなるが、加古川市周辺では見る機会が多くはないチョウである。



May 30, 2015 通いなれたフィールドで初めて出会うチョウたち

ヒメヒカゲのトランセクト調査過程で、予期せぬゼフィルスに出会えて感激。ギフチョウの生息雑木林では秋に二度実施する不要常緑樹として伐採対象とするツゲが、この調査ルート上で花を咲かせており、よく観察するとウラナミアカシジミが確かにこの花に口吻を伸ばして吸蜜をしている。トランセクト調査を終えて、別の生息調査区域へと踏み込むと、ケネザサの葉陰で休息しているミズイロオナガシジミ *Antigius attilia* にも出会う。背丈の低いケネザサの葉裏にとまるミズイロオナガシジミなんて見たことはなく、いい撮影角度を狙っていたら、驚いて場所を変えてしまう。後翅の淡い白水色模様がわずかに見られるが、開翅姿勢までは望めず。

